

△卒△母再	田夷田田○※単	フツクモリ	コレナオサント
①※①夷兼	凡兼田田再単	カンガエテ	キネナナミチノ
◎夕△再田	①再△母再田夷	アワウタオ	カミフソヨコエ
凡○田再単	开母△母再田夷	イサナギト	シモフソヨコエ
凡○田再単	△再凡卒△兼兼	イサナミト	ウタイツラネテ
○开△夷○	△再再兼田夷田	ヲシユレハ	ウタニネコエノ
再再凡△兼	再再田田再○母	ミチヒラケ	タミノコトバモ
単単田夷○	田①△再田田母	トノエハ	ナカクニノナモ
◎夕△再母		アワクニヤ	

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

二神のイサナギ、イサナミは、ナカ国の葦原の沖ツホ(政治の中心)の宮に居て、臣民たちに国生め(政り成せ)と勅りされました。その理由をお聞きますと、最近、民の言葉の語彙が、黒雲がわき出て青空を一斉に覆うようにふつ曇りすると嘆いておられました。そこで二神はこれ直さんと考えられて、五音七道のアワ歌お俄かに取り出されて、上の二十四声の「アカハナマ イキヒニミウク フヌムエケ ヘネメヲコホノ」をイサナギが美しく歌われると、それに合わせようと、下の二十四声の「モトロソヨ オテレセエツル スンチリ シキタラサヤワ」をイサナミがお歌いになりました。

そして、そのアワ歌の歌声は、イサナギとイサナミが長く歌い連ねられてこられ、国生む道を民に教えられて来られるは、アワ歌に宿る言霊の魔力に音声の道もひらけます。この甲斐があって民の言葉も整えは、ナカ国の名もアワの歌に準えてアワ国やと呼ばれるようになりました。

5アヤ(紋)5(2行)~6(4行)【本文】

ラシテ	カナ文字
卒△开再再△水	ツクシニミュキ
再再田田田	タチハナオ ウエテトコヨノ
再再田夷○	ミチナレバ モロカミウケテ
再再田再△	タミオタス タミノオトトム
再母田田母	ミヤノナモ オトタチハナノ
◎夕水再母	アワキミヤ ミコアレマセバ
母再水兼単	モチキネト ナツケテイタル

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

アワ(ナカ)国も治まって来たある日のことです。イサナギ、イサナミは、筑紫から上って来たカナサキ、ムナカタの両臣より「筑紫へもお出で下さい」との内々の話を受けておりました。それから暫くして、アワ国の用事が一段落するのを見計らって二神は筑紫に御幸されました。そして、イサナミが御幸で立ち寄られた巡行の宮の印として、殿の南に橋おの苗を植ゑられて常世の道(天成る道と同じ意味)成れば、筑紫の三十二の諸神の同意を受けてイサナミは民お治す(治されました。)

そして、魂を繋ぐ糸や紐などの細長い魂(玉)の緒を留む(とどめ)られたことより、後に殿(宮)の名もオトタチハナのアワキ宮と呼ばれるようになりました。その間、長居されたナミナギ、イサナミは御子を生まれませば、筑紫の夜を照らす長月夜の望月に準えて、皇子の名をモチキネ(後の月読神)と名付けてソアサ国に至たられ(る)。

5アヤ(紋)7(1行)~7(3行)~【本文】

ヲシテ		カナ文字	
母◎母△舟	母△田舟田田田	ソアサクニ	サクナギノコノ
凡舟卒瓜田	△▽舟田単◎田	イヨツヒコ	ウタニコトバオ
田△多子茶	△▽田田舟単卒	ナラワセテ	フタナオモトム

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

現在の四国地方を古代ではソアサ国と云っておりました。その頃ソアサ国を治めていたのが、イサナギの叔父のサクナギです。そのサクナギの子の長子には伊予津彦がいます。ソアサ国に御幸されたイサナギ、イサナミの二神は、これからソアサ国を背負って行く伊予津彦に向かって、和歌に言葉お乗せて、国治めの国成る道を習わせて、これからはソアサ国を、伊予と阿波の二名に分けて国お治めることを求むと勅りされました。

5アヤ(紋)7(4行)~8(3行)【本文】

ヲシテ		カナ文字	
◎多卒瓜田	母母舟舟▽舟茶	アワツヒコ	ソサニキタリテ
凡舟卒△舟	舟卒◎舟舟母△	ミヤツクリ	シツカニキマス
舟舟舟△舟	▽舟◎田△茶茶	キシキクニ	タチハナウエテ
単田舟母単		トコヨサト	

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

その間、サクナギの子の次男の**阿波津彦**は、父のサクナギに呼ばれて**ソサ**(素佐、紀州)に**来たりて**、**宮造りし静かに宮に居ます**。その**紀志井**(素佐、紀州)国は、太平洋に面した温暖な気候の土地柄にもなり、その紀志井国に適した**橘**(ミカン科の常緑小高木)が数多く**植ゑられて**、**アマカミ**(天神)が余生を送るに最適な国の印として、**トココ里**に選ばれたのでした。

5アヤ(紋)8(3行)~(4行)【本文】

ヲシテ		カナ文字	
⊕ 水 舟 彡 艹 𠂔 火			サキニステタル
𠂔 火 田 𠂔 艹	△ 𠂔 𠂔 𠂔 艹 𠂔 火	ヒルコヒメ	フタタビメサル

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

先の1アヤ(綾)にて、「ワカ姫の神 捨てられて 拾たと育つ」の文章があります。そのワカ姫は幼名をヒルコと云いました。ヒルコ姫が三歳になるとイサナギ、イサナミの二神が天の節(厄年)に当たり、厄年を払う風習の行事で、一度、**捨てられたるヒルコ姫は**、3アヤ(綾)において「これの前 汚穢隈に捨つ ヒルコ姫 今慈しに 足り至り 天(アマテル神)の妹と」賜り、**再び天の原に召さ(る)**れました。そして、二神より新たな名の**ワカヒルメ**(若昼女)を賜られたのでした。

5アヤ(紋)9(1行)~12(3行)【本文】

ヲシテ		カナ文字	
⊕ 田 田 𠂔 𠂔	△ 𠂔 田 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔	ハナノモト	ウタオヲシエテ
田 田 △ 𠂔 𠂔	田 𠂔 田 田 水 𠂔 田	コオウメバ	ナモハナキネノ
𠂔 𠂔 田 𠂔 𠂔	𠂔 𠂔 𠂔 田 𠂔 𠂔 𠂔	ヒトナリハ	イザチオタケビ
𠂔 水 𠂔 水 𠂔	田 田 △ 𠂔 田 𠂔 𠂔	シキマキヤ	ヨノクマナセハ
⊕ 田 田 𠂔 𠂔	彡 𠂔 𠂔 田 田 田 水	ハハノミニ	ステドコロナキ
田 田 △ 𠂔 田	𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 △ 𠂔 𠂔	ヨノクマオ	ワガミニウケテ
𠂔 田 𠂔 𠂔 田	⊕ 𠂔 田 𠂔 田 田 △	モロタミノ	カケオツクナフ
𠂔 △ 𠂔 田 田	𠂔 𠂔 𠂔 田 𠂔 田 田	ミクマノノ	ミヤマギヤクオ
田 田 ⊕ 𠂔 𠂔	△ 田 田 田 ⊕ 𠂔 田	ノソカント	ウムホノカミノ
⊕ 田 𠂔 𠂔 𠂔	𠂔 ⊕ 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔	カグツチニ	ヤカレテマサニ
田 𠂔 △ 𠂔 田	△ 𠂔 𠂔 𠂔 田 ⊕ 𠂔	オワルマニ	ウムツチノカミ
⊕ 田 𠂔 △ 𠂔	𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 ⊕ 𠂔 田	ハニヤスト	ミヅミツハメゾ
𠂔 ⊕ 田 △ 𠂔	田 𠂔 田 田 田 田 田	ワカムスヒ	クビハコクワニ
田 田 ⊕ 田 田	田 田 △ 田 田 田 田	ホソハソロ	コレウケミタマ

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

二神はソサ(紀州)国に御幸されるやタチバナ(橘)の花のもと(花の咲いている木の下)で、アワの歌お教えて国を治められます。イサナギの妻のイサナミが三男の子お生めば、イミ名(実名)もハナキネ(花杵)のその人となりは、とても凶暴で、その振る舞いはいざちる(涙を流してはげしく泣く)、雄叫び(勇ましい叫び声)するや、また、穀物の種を蒔いた上に、更に種をまいて穀物の生育を害する重播きをするや、悪さには限りがありませんでした。このようなハナキネの世の隈なす行為を起せは起こすほど、イサナミは母の身としてハナキネが心配になられました。更に、今までにも況して、ハナキネの行為を捨てられるどころか、捨てる処(場所)もなきやと嘆かれました。そして、ハナキネが巻き起こす世の隈の悪行おイサナミは一心に我が身に受けて、そのイサナミの慈しみの心の祈りは諸民の心にも伝わり、その祈りは、母イサナミの祈りの心に気付かない「ハナキネの欠け」お償ふものでした。

そして、イサナギ・イサナミの二神は、世の隈お鎮めるために、本宮、那智、新宮の三ヶ所に熊野の宮を建てられて、深山木(奥深い山に生えている木)を焚いて厄くお取り除かんと祈られました。更に、生む火の神の「カグツチ」に焼かれて厄を払われました。正に世の隈なす行為の数々が終わる間に生む土の神の名は「ハニヤス」と云い、水の神の「ミヅミツハメ」ぞ。また、火の神の「カクツチ」と土の神の「ハニヤス」が生むその子は、「ワカムスヒ」と云います。その「ワカムスヒ」が申すには、人の首は体の重要な個所です。そのため、民がコクワ(蚕桑)により家中が満たされるのを願うように、君も臣も、民がホソ(臍→へそ、本心)はソ(水稻)ロ(穀物)作りであり、秋には穀物が豊かに実るように祈られたのでした。これもウケのミタマと保食も、荷田の神の教えになるようです。

5アヤ(紋)12(4行)~17(4行)【本文】

	ラシテ	カナ文字		
凡	⊕	⊕	イサナミハ	アリマニオサム
⊕	⊕	⊕	ハナトホノ	トキニマツリテ
⊕	⊕	⊕	ココリヒメ	ヤカラニツクル
凡	⊕	⊕	イサナギハ	オヒユキミマク
⊕	⊕	⊕	ココリヒメ	キミコレナミソ
⊕	⊕	⊕	ナオキカズ	カナシムユエニ
水	⊕	⊕	キタルトテ	ユヅノツケクシ
⊕	⊕	⊕	オトリハオ	タヒトシミレハ
△	⊕	⊕	ウチタカル	イナヤシコメキ
水	⊕	⊕	キタナキト	アシヒキカエル
母	⊕	⊕	ソノヨマタ	カミユキミレハ
⊕	⊕	⊕	カナマコト	イレズハチミス
△	⊕	⊕	ワガウラミ	シコメヤタリニ

回多开元火	卒火煎△典舟卒	オワシミル	ツルギフリニゲ
返風△△火	开回卒単典④元	エビナクル	シコメトリハミ
回血舟回△	甲卒△开△△火	サラニオフ	タケクシナクル
回夷母④元	母甲回凡△夷の	コレモハミ	マタオイクレハ
母母田水舟	①△夷策母母田	モモノキニ	カクレテモモノ
元回△△火	策夷の开典母△	ミオナクル	テレハシリゾク
返風△△△	△开の卒卒舟开	エビユルク	クシハツケヨシ
母母田△回	回回①※卒元単	モモノナオ	オホカンツミト

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

世の隈お我が身に受けられた**イサナミ**の亡骸は、三重県熊野市有馬町上地 130 にある**有馬**の「花の窟」墓所に納む。そして、イサナミを偲んで五月の花が咲く頃と十月の稲穂の実る時に祀りて天の原に報告されました。（花の窟神社に花を飾り、舞を捧げる「お綱掛け神事」は、毎年二月二日と十月二日に行われ、ホツマの記述とは少し違うようです。）そして、イザナギの妹の**ココリ姫**は、御田族にイサナミの神上がりりを告げる役目を引き受けられたのでした。また、君(夫)であるイサナギは、妃(妻)のイサナミが神上がりされたのを聞きつけられるや、駆けつけられた**イサナギ**は、イサナミを追ひかけて行きイサナミの亡骸を見まく(見ようとします。)その行動を見られていた**ココリ姫**は、「君これなにを見そめんとするや」と注意されました。それでもイサナギはココリ姫の諫めをなお聞かずして、「悲しむ故にイサナミに会いに来るといっても許してくれないだろうが」と述べられるのでした。

そこで自生していた**ユヅ**のツケ櫛お取り、枝に付いている④(葉)お燃やして手火としイサナミの亡骸を見れば、その亡骸にはすでに**蛆虫**たかっているようです。その容姿はすでに昔のイサナギではいなや(否や)。変貌した容貌のみにくい女の**醜女**きになり、イサナギはその姿を一目見ては汚きと云いつつ足曳きながら帰られるのでした。このイサナギが汚いと云って帰られたそのものの行動が、にわかには妻のイサナミの心に不信が芽生えたのでした。また、イサナギは、その夜にまた神上がりされたイサナミの亡骸を**行き見られれば**、そのイサナギの行動の全てが最早偽りの夫婦愛の**かなまこと**(要誠)と悟られてイサナギは、イサナミを安置した岩室には**入れず**、反対にイサナミに恥をかかすことのみになっていたようです。そして、イサナミの御魂は「我が恨み」と申して、醜女の八人にイサナギを**追わしむる**のです。

イサナギは恐ろしさのあまり追手に向かって**剣を振り振り逃げ**、また野に自生する**エビ**(葡萄)を摘んでは投ぐる。それに対し**醜女**はエビ(葡萄)を手に取りながら**喰み更に追ふ**。それでも追って来るために、イサナギは**竹櫛**を投ぐる。それに対し再び、醜女はこれも喰み。それでもまたまた醜女が**追いければ**、イサナギは醜女に反撃するために**桃の木**の影に隠れて**桃の実**お投ぐる。そしてイサナギの桃の実の反撃が効果をあげてれば醜女は退く。それにしても醜女への反撃は、**エビ**(葡萄)はゆるくて効果がなかったが、櫛では竹櫛よりも**黄楊**が最もよしと云えるようです。そして、醜女の退治に用いた**桃の名**おこれからは「**オホカンツミ**(大神つ実)と呼ぶことにしよう」とイサナギは申されたのでした。

5アヤ(紋)18(1行)~22(1行)【本文】

ラシテ		カナ文字	
凡 ^① 田 ^② 飛 ^③ 単	由 ^④ 母 ^⑤ 卒 ^⑥ 爪 ^⑦ 虫 ^⑧ ①	イサナミト	ヨモツヒラサカ
田 ^⑨ 単 ^⑩ 母 ^⑪ 卒 ^⑫	凡 ^⑬ ①田 ^⑭ 飛 ^⑮ 凡 ^⑯ 虫 ^⑰ 虫 ^⑱	コトタチス	イサナミイワク
虫 ^⑲ 虫 ^⑳ 虫 ^㉑ 開 ^㉒ 母 ^㉓	①虫 ^㉔ 田 ^㉕ ①①虫 ^㉖ 虫 ^㉗	ウルワシヤ	カクナササラハ
母 ^㉘ ①虫 ^㉙ 虫 ^㉚ 虫 ^㉛	凡 ^㉜ 凡 ^㉝ 母 ^㉞ 虫 ^㉟ 虫 ^㊱ 虫 ^㊲	チカウベオ	ヒヒニクヒラン
凡 ^㊳ ①田 ^㊴ 母 ^㊵ 母 ^㊶	虫 ^㊷ 虫 ^㊸ 虫 ^㊹ 開 ^㊺ 母 ^㊻ 虫 ^㊼ 虫 ^㊽	イサナギモ	ウルワシヤワレ
母 ^㊾ 田 ^㊿ 母 ^㉑ 母 ^㉒ 母 ^㉓	虫 ^㉔ 飛 ^㉕ 虫 ^㉖ ①母 ^㉗ 母 ^㉘ 母 ^㉙	ソノチキモ	ウミテアヤマチ
田 ^㉚ 母 ^㉛ 田 ^㉜ 母 ^㉝ 田 ^㉞ 母 ^㉟	母 ^㊱ 母 ^㊲ 虫 ^㊳ 由 ^㊴ 母 ^㊵ 卒 ^㊶ 田 ^㊷	ナキコトオ	マモルヨモツノ
爪 ^㊸ 虫 ^㊹ ①①虫 ^㊺	凡 ^㊻ 母 ^㊼ 母 ^㊽ 虫 ^㊾ 虫 ^㊿ 田 ^㉑	ヒラサカハ	イキタユルマノ
①母 ^㉒ 母 ^㉓ 凡 ^㉔ 虫 ^㉕	田 ^㉖ 虫 ^㉗ 母 ^㉘ ①虫 ^㉙ 開 ^㉚ 田 ^㉛	カキリイワ	コレチカエシノ
①飛 ^㉜ 田 ^㉝ 母 ^㉞ 母 ^㉟	虫 ^㊱ 母 ^㊲ 飛 ^㊳ 虫 ^㊴ ①虫 ^㊵ 虫 ^㊶	カミナリト	クヤミテカエル
母 ^㊷ 母 ^㊸ 卒 ^㊹ 飛 ^㊺ 母 ^㊻	凡 ^㊼ 田 ^㊽ 開 ^㊾ 田 ^㊿ 母 ^㉑ 母 ^㉒ 田 ^㉓	モツミヤ	イナシコメキオ
母 ^㉔ 母 ^㉕ 虫 ^㉖ 母 ^㉗ 母 ^㉘	田 ^㉙ 母 ^㉚ 田 ^㉛ 開 ^㉜ ①虫 ^㉝ 母 ^㉞ 母 ^㉟	ソソガント	オトナシカワニ
飛 ^㊱ 母 ^㊲ 母 ^㊳ 開 ^㊴ 飛 ^㊵	母 ^㊶ 母 ^㊷ ①卒 ^㊸ 凡 ^㊹ 田 ^㊺	ミソキシテ	ヤソマカツヒノ
①飛 ^㊻ 虫 ^㊼ 飛 ^㊽ 飛 ^㊾	母 ^㊿ ①母 ^㉑ 田 ^㉒ 田 ^㉓ ①虫 ^㉔ 虫 ^㉕	カミウミテ	マガリナオサン
①虫 ^㉖ 田 ^㉗ 田 ^㉘ 凡 ^㉙	田 ^㉚ 田 ^㉛ 田 ^㉜ 田 ^㉝ 凡 ^㉞ ①飛 ^㉟	カンナオヒ	オオナオヒカミ
虫 ^㊱ 飛 ^㊲ 飛 ^㊳ 母 ^㊴ 田 ^㊵	凡 ^㊶ ①母 ^㊷ 由 ^㊸ 虫 ^㊹ 開 ^㊺ 飛 ^㊻	ウミテミオ	イサキヨクシテ
田 ^㊼ 母 ^㊽ 凡 ^㊾ 母 ^㊿ 虫 ^㉑		ノチイタル	

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

イサナギはイサナミと死後に靈魂が通るとされる黄泉つ平坂に於いて、イサナミとの妻定めの契りが自然消滅する事断ちの儀式が行われたのです。その事断ちの儀式を覗いて見ますと、イサナミ曰く「天の原での生活は斯くも麗し(挨拶程度の意味。気品があつてきれいだ)や、そして、かく赫云々なさは、事断ちを誓うべお日々に括らん(日毎、覚悟を決めていたに違いない)。」

イサナギも曰くは、「麗しや我国のその千五百人の子らも生みて、一人して過ち無きことお見守る黄泉つの平坂は、この世に生まれて来た人たちが行き絶ゆる間の一里塚としての限り岩になるであらう。」これは人の生命の道の繰り返しの神の限り岩と成るなりと悔みて帰る三熊野の本つ宮。そして「かいな」との呼び合うイサナギのかけ声は、黄泉の国の恐ろしい女の鬼の醜めきお注がんと、和歌山県田辺市本宮町の熊野川に流れ込むオトナシ(音無)川の流れに禊して、初めに八十禍津日(やそまがつひ)神の神生みて、心拗けの曲がり直さん。次に神直日(かみなおひ)、大直日神(おおなおひのかみ)を生みて身お潔くして、後、至る筑紫のアワキ宮。

5アヤ(紋)22(1行)~27(1行)【本文】

ラシテ	カナ文字
卒△开◎多木田	ツクシアワキノ
元母木舟の	ミソキニハ ナカガワニウム
母田卒卒卒	ソコツツオ ツキナカツツオ
△多卒卒卒	ウワツツオ コレカナサキニ
母卒△开卒	マツラシム マタアツカワニ
母田母田◎	ソコトナカ カミワダツミノ
元◎元△卒	ミカミウム コレムナカタニ
母卒△开卒	マツラシム マタシガウミニ
开母卒元田	シマツヒコ ツギオキツヒコ
开◎田◎元	シガノカミ コレハアツミニ
母卒△开卒	マツラシム ノチアワミヤニ
元田母田母	ミコトノリ ミチヒキノウタ
◎多元元母	アワギミヨ ワカレオシクト
卒母田△△	ツマオクル オウトハユカズ
母卒の◎元	ユケハハチ シコメニオワス
母开◎开田	ヨシアシオ シレハアシヒク
母母卒◎◎	ヨモツサカ コトタチサクル
△卒多◎母	ウツワアリ ミソギニタミノ
母母田凡策	トノイテ イヤマトホル
◎开元木田	アシビキノ チキオノオタノ
元卒田◎△	ミツホナル

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

魂(玉)の緒を留む筑紫宮の名もオトタチハナのアワキ宮。その筑紫のアワキ宮での禊には、筑紫の祖であるシマツヒコは、現在の福岡市博多区を流れる那珂川に生む。その神子の名はソコツツオ、次、ナカツツオ ウワツツオの三兄弟であり、これをカナサキ(注1)に「スミヨロシ(隅宜し、住吉の原語)」の神として住吉神社に祀らしむ。

また、ホツマツタエには、アツ川の川辺の地に底と中、上ワダツミ(注3)の三神生むと記述しており、これをムナカタ(宗像)に祀らしむと記述しておりました。だが、現在のムナカタの地(注4)には、「ワダツミ」の神を祭る神社ではないようです。そして、現在の宗像大社は、日本書紀の記述よりアマテル神の三女神をお祭りする神社のようです。更にホツマツタエには、「また志賀海にシマツヒコ、次に子の

田 田 〇 卍 田	田 〇 卍 田 田 田	コノアチオ	ヌバタマノヨノ
△ 卍 田 田	田 田 田 田 田 田	ウタマクラ	サメテアカルキ
田 田 田 田 田	田 田 田 田 田 田	マエコトバ	ココロオアカス
△ 卍 田 田	田 田 田 田 田 田	ウタノミチ	ミノキノミチハ
田 田 田 田 田	田 田 田 田 田 田	ミオアカス	ヤマトノミチノ
	田 田 田 田 田 田		オオイナルカナ

解説文（赤文字は、原文の現在訳です。）

ヤマトの国には、アマカミ(天神)の御世より伝わる「真のヲシテ(法典)」がありこれを真瓊と云います。この意味は、「瓊は整ふる ヲシテなり(17 アヤ 11)」であり、真理を書き記したものでした。その真瓊の教系には国造りの基本が書かれ、アマカミ(天神)は「カカン(日神)を成して国を治めるには、日々、物事に頓着しないでノンきに民を見守ることが寛容」との趣旨が書かれておりました。そして、この言葉を言い換えますと「アマカミ(天神)が朗らかであると伴に民も健やかになり、ひいては国中を和す」との意味であったようです。

その頃のアマカミ(天神)のお住まいは、ナカ国のアワ国(淡国、現在の琵琶湖の辺の国を指す。)になります。また、アマカミ(天神)が住まれた当時のアワ国はデンヤマトと呼ばれ、アマカミ(天神)を頂いた国中の民は引き明るき葦原の民の歌として歌われるも、民はその歌に込められた真瓊の教えの意味が不明でした。そのため、民に理解させようと、アマカミ(天神)は民に向かって「悟れよ」と和しながら語られたのでした。

真瓊の道の徹(通)らぬ前の「足引きの枕詞は歌の種」、「足引きの枕詞は山」、「ほのほのの枕詞は明け」、「射干玉の枕詞は夜の種」また、島に住みつく鳥の鶺鴒の枕詞は沖つ鳥と呼ばれているが、その実態は鶺鴒の群れと鶺鴒船なります。この枕詞の妙味お射干玉の夜の歌枕と云い、覚めて明るき前詞は心お明かす。そして、歌の道と禊の道を極めれば、自ずと身お明かすことに成ります。これこそがアマカミ(天神)が教授しなくてはならない、天御祖神の心であり、後のオノコロであり、ホツマの真髓であり、弥真瓊の道の大きいなるかな。

(5 アヤ おわり)